

# 日本記者クラブ会報

第 472 号  
2009 年  
(平成 21 年)  
6 月 10 日 発行

〒一〇〇一〇〇一  
東京都千代田区内幸町二ノ二ノ一  
日本プレスセンタービル  
◎ 社団法人 日本記者クラブ  
http://www.jnpc.or.jp

## 新理事長に斎藤史郎(日経)氏

### 滝鼻路線継承し「発信力」強化

5月29日の総会で第19期の役員(19ページ)が決定した。この総会で、2期4年、野心的にクラブを陣頭指揮した読売の滝鼻卓雄理事長が退任した。これを受け新役員による第1回の理事会で、満場一致で、後任理事長に日経の斎藤史郎専務取締役(写真)が互選された。

斎藤氏は1948年生まれ、72年



会員懇親会で高らかに乾杯の発声  
写真=産経新聞社

に日経入社。東京本社経済部長、編集局長、常務取締役を経て、08年3月から現職。

クラブではこれまで会員資格委員長を務めていた。「さらに発信力に磨きをかけたい」という新理事長の就任あいさつと、前理事長の退任の弁は2ページに。

また理事会は、

- 副理事長、専務理事、各委員会の委員長も次のように決めた。
- 副理事長 宇治敏彦(再任 中日)
- 今井環(再任 NHK)
- 専務理事 岩崎玄道(再任)
- 総務委員長 朝比奈豊(再任 毎日)

資格委員長 朝倉敏夫(新任 読売)

企画委員長 船橋洋一(再任 朝日)

会報委員長 住田良能(再任 産経)

施設委員長 渡辺興二郎(新任 テレ朝日)

滝鼻前理事長も、戦いのあとをふりかえって書かれているが、情報や権力をもつニュースソースの人たちが、公に発言する場を避ける傾向が強くなっている。なぜそうなっているのか。プレスの側としても自戒すべきは自戒して、健全な公共圏を維持するためにも、粘り強く折衝し理解と協力を得なければならぬ。

ともかく政権交代含みの解散・総選挙が迫っているので、政治が当面の最大イシューだ。先月の企画委員会では、選挙前に麻生首相、鳩山代表など、与野党の党首を逐次ゲストとして招くことを決めた。

当然、総選挙公示の前日には「党首討論会」を主催することになる。続投の船橋企画委員長は、党首討論会に臨む陣容を内定し、文化、科学などの専門家を加え、企画委員会の

拡充・充実をはかるよう事務局に指示している。

### 公益社団法人への移行

公益法人改革で、従来の社団法人は2013年までに、公益社団法人になるのか一般社団法人になるのかを選択しなければならぬ。

この改革で、従来の主務官庁による公益法人の設立許可制度はなくなり、剰余金の分配が目的でない社団は、登記のみで一般社団法人格が得られる。

ただし公益社団法人になる場合は、民間有識者による委員会の認定が必要になる。認定を受けると、クラブは特定公益増進法人並みの寄付優遇の対象になる。

認定基準のポイントは公益目的事業比率100分の50以上ということ。この点クラブは問題ないと思う。問題は理事会の構成などだろう。公益性を担保するために、特定業種代表だけにならないよう求めているようだ。が、プレスの独立性という点からこれは譲れない。

斎藤理事長、朝比奈総務委員長と相談しながら、来春の申請を視野にいれ、これまでの実績を前提にして準備に入りたいと思っている。

(専務理事 岩崎玄道)

百年に一度というのは本当かどうかわかりませんが、日本経済も世界経済も大きく揺れています。政界も政権交代はか非かで、緊張感がいやがうえにも高まってきました。そんな中で日本記者クラブの理事長に就任いたしました。

実力派の滝鼻前理事長に比べれば器も小さく、戸惑うばかりですが、めぐりあわせということでお引き受けすることにいたしました。幸い、副理事長をはじめ各委員会の委員長は実力者ぞろい。全

### 新旧理事長のことは

4年前のクラブ会報に「日本記者クラブをニュースの修羅場にしたい」と書いた。少し過激に聞こえたかもしれないが、私の本心は、日本記者クラブが単に会員同士の懇親の場だけではなくて、世界のメディアが反応するニュースの発信基地であってほしいと願ったからである。

この私の「野心」は達成したかどうか。残念ながら、自分自身の力が不足していたために、世界のニュース基地としての地位を確立

面的な助けを借りながら、誠心努力するつもりです。

メディア界は大競争の時代に入っています。情報は巷に氾濫、イ

## ジャーナリズムの牙城に

齋藤 史郎

インターネットの情報は玉石混交というよりは玉礫混交。怪し気な情報やウソの情報もあふれています。価値ある本物の情報は何か。

することは出来なかった。クラブの役員、事務局の方々の渾身の協力があつたにもかかわらず、ニュース基地としての使命を十分に果

## 狙った獲物逃がさないで

滝鼻 卓雄

たしたとは言えない。

この4年間、世界は動き、日本も激流の中に放り出された。具体的に言えば、テロリズムとの戦い、

情報を見極め、評価して、人々に正しく伝える——。この「評価機能」こそがジャーナリズムの原点ではないでしょうか。その重要性はますます高まっています。

日本記者クラブがその拠点として役割を果たし、さらに強固になることを願っています。

国際的にはジャパン・パッシングといった現象が広がっています。注目すべきは中国やインドや

倫理なき金融経済の破綻、感染症の逆襲、情報社会の奇形化などなど、ジャーナリストとして最も好奇の目をもって対峙しなければならぬ事象について、クラブは十分

対応したいと努めたが、必ずしも十分ではなかった。私の能力を棚に

上げれば、理由はいくつもある。その一つは、ニュース・メーカーが自由に発言する場をつくることに、情報と権力を持っている人た

その他アジアの国々。日本が世界の人々の視野から消えかけているという現象です。

しかし、このことは海外の人々や国が意図的に仕組んでいるわけではありません。日本経済の地盤沈下もさることながら、日本からの海外向け発信力が極端に弱いことが大きな原因ではないでしょうか。

日本記者クラブをジャーナリズムの牙城と位置づけ、内外に衝撃を与える情報発信基地として、さらに磨きをかけたいと考えています。

(日本経済新聞社専務取締役)

ちが、消極的になっていたことである。ニュース・メーカーをクラブに引きずり出そうとしても、それを阻害する、あるいは自ら引込んでしまう事態にぶつかったことがある。

しかし、一人ひとりのジャーナリストは、狙った「獲物」を取り逃がすことはなかっただろう。クラブとしても狙った「獲物」

を逃がさないよう、ニュースの「修羅場」となることを心より願っている。

(読売新聞東京本社相談役)



「4年間ご苦労さまでした」—滝鼻氏に斎藤新理事長から花束が贈られた=産経新聞社提供

総会、クラブ賞贈賞式、総会記念講演に続いて、午後5時半から会員懇親会が宴会場で行われ、150人が出席しました。

斎藤・新理事長が出席者にクラブ賞受賞の伊藤正（産経）、阿武野勝彦（東海テレビ）両氏を紹介し、お祝いの杯をあげました。伊藤氏は「中国の魔力への愛着」を、阿武野氏は新作「検事のふるしき」（6月27日放送予定）の制作を報告し、受賞の喜びを語りました。

お二人が会報に寄せた「受賞のことは」は4、5ページに掲載。

会員懇親会 (5・29)



阿武野氏(中央)と石黒大山東海テレビ会長(右)、広中幹男同報道局長



伊藤氏(中央)を祝福する住田良能産経社長(左)と元「産経抄」の石井英夫さん=産経新聞社提供



滝鼻夫妻と談笑する産経の鳥海美朗(左)、名雪雅夫の両会員



久しぶりに松山幸雄さん(右から2人目)、岩見隆夫さん(右)に会えて楽しかったと総会記念講演ゲストの辻井喬さん(中央)。左は国正武重、田中洋之助、田村玲子の各会員

左から板東(徳島)、星野(新潟)、斎藤(北日本)、土山(西日本)、三石(信毎)の東京支社長のみなさん



朝比奈総務委員長(左)と清水美和会員(東京)



## 記者クラブ賞

2000年初夏、共同通信の定年を前に、故齋田一路社長から続投を要請された。提示された役職に不満はなかったが、「2、3日考えさせてください」と態度を保留すると、齋田氏は驚いた様子で、しばらく沈黙し、そして努めて冷静な声で言った。「ほかに行くあてがあるのか」。

60歳の年齢、10年近いブランク、胃と心臓の持病……。家族は共同への残留を望み、私自身も共同に愛着も義理もあったが、たとえ短期間でも、取材現場に戻りたいという衝動を抑え難かった。その思いを話すに、齋田氏は「それは面白いね」と言った。産経行きを後押しする彼らしい表現だった。その場で私は産経への移籍を決心した。

私の産経入社当時、中国総局長は古森氏で、中国報道に新風を巻き起こしていた。その後任として北京には2000年12月に着任した。中国はニュースの宝庫である。年齢など気にしているヒマはなく、走り回った。そして03年夏、胃潰瘍が悪化、大量の血を吐いた。

その後の検診で胃がんが発見され、日本で手術を受けるため北京を引き払った。もう北京には戻れない

北京に常駐する800人を超える外国人記者の中で、6月で69歳になる私は最年長であると同時に、通算16年余の北京常駐期間も最長らしい。長くやればいいというものではないが、今回の受賞は、定年後の現場復帰という、いわば延長戦に挑んだことへの褒美だと思っている。人生の転機から書く。



てもいた。

## 延長戦への挑戦 中国の魔力にとりつかれて

伊藤 正

(産経新聞中国総局長兼論説委員)

を広げた記者が少なくない。

私にはありがたかった。長い付き合いを通じ、私の気質も適性もよく知っていた齋田氏は、私の共同への未練を断ち切ってくれたのだと思う。

産経に移って新聞社と通信社の違いを知った。紙面作りへの努力は、毎週末、会長、社長ら首脳陣から一般記者まで参加して行う勉強会「社論編集会議」にも表れていた。他社のベテラン記者の移入も同様で、既に本賞を受賞している古森義久、黒田勝弘両氏はじめ移籍後に活動の場

と思い、退社する決意だった。がこの二度目の転機は産経首脳陣の温情によって乗り越え、半年後の04年春、北京に復帰することができた。

それからしばらくして構想されたのが、今回主要な授賞理由になった「鄧小平秘録」の連載企画だった。資料の収集と読み込みや関係者の取材に約2年かかり、07年2月から1年に及んだ連載中はいつも朝帰りになった。助手として派遣された矢板明夫記者(現中国総局長)の支援が非常に大きかった。

今年1月、胃がんが再発、内視鏡手術を受けた。それもあって妻は今回の受賞について「そろそろ後進に道を、という意味ね」と言っている。しかし中国の魔力からなお解き放たれそうもない。

いとう・ただし 1940年6月生まれ。埼玉県出身。東京外国語大学中国語科卒。65年共同通信入社。香港、北京、ワシントン特派員を経て、87、91年北京支局長。編集局次長、論説委員長などを歴任後、2000年7月産経新聞に移り、同年12月から現職。主な著書に「鄧小平秘録上・下」(産経新聞出版)、「鄧小平と中国近代化」(教育社)、「チャイナ・ウォッチング」(CBS・ソニー出版)、「チャイナ・レビュー」(PHP研究所)、「中国の失われた世代」(PHP研究所)、訳書に「新中国人」(新潮社)など。



読売新聞社提供

## 2009年度 日本

陽光を浴びる山椒の鉢植え。背丈20センチほどの幼木に物語があります。

3年前、徳山ダム<sup>\*</sup>の取材で美濃の山奥に半年、通い続けました。その折、幾度も泊めてもらった小屋の裏に山椒の原木がありました。その木の下。落ちた種が自然に芽吹いたのでしょう、何とも風格を感じさせる幼木がありました。我が家の鉢植えは、ダムの底に沈んだ山々への惜別の思い出としてもらい受けたものです。

今年、その山椒は、二度目の春を待っていました。しかし、この冬、

いたずら盛りの愛犬が、枝をガリガリ。芽吹きを遥かに過ぎて、一葉の緑もないまま、春は深まりました。厳しい奥美濃の冬には耐えられても、突然の「蛮行」には弱いのか。木の肌は蒼白、命の色を失ったままでした。

しかし、陽光に当て、水を欠かさずにいました。予期せぬことが起こるものです。驚き、桃の木。枝の股の、不思議なところから遅い芽吹きを見たのです。

## ジャーナリストティックなテレビの職人に

阿武野 勝彦

(東海テレビ放送報道局専門局長)

テレビドキュメンタリーは、独りではできない仕事です。プロデューサー、ディレクター、カメラ、音声、編集、効果、庶務デスク、ナレーター、そして芸能プロのマネジャー……

重い機材を背負い、心を裸に対象に相対し、何カ月も深夜まで編集を重ね、経験を動員し、あるいは経験則を全く捨て、事実を薄皮のように丁寧な剥き、想像力という翼を広げ、スタッフの総力を尽くして、ようやく1本の番組にたどりつきます。思

えば、どんな時も、陽光と水を私に注ぎ続けてくれたのは、わがスタッフでした。番組が完成するたびに、わがスタッフに誇りを実感し続けてきました。

私は「テレビの職人」を自認してきました。しかし、長いこと「ボクはジャーナリストだぞ」そう言っている笑われてきました。本物の「ジャーナリスト」は、自分を「ジャーナリスト」とは言わない……。どうやら、そこが笑いのツボでしたが、テレビ

の世界で一体何がジャーナリストティックなのか。自嘲と自戒を込めて発してきた問いです。

「誰のため……何のため……」私は、常に原点を忘れてはなりません。取材現場、取材対象に鍛えられながら、多様な生き方を許容している社会になるようにメッセージを発していく、それがメディアに生き残るものとしての使命だと思っています。未曾有の経済不況の中で、メディアの経営基盤が揺れています。し

かし、私たちの存在意義は、どこにあるのかという原点を見失ってはいけないと思っています。

陽光と水をやり続ければ、一葉の緑が芽吹くこともある……。人生には予期せぬことが起こります。「ボクはジャーナリストだぞ……」四半世紀もののギャグは、なんだか嫌味になるので、もう使えませんが、自慢のスタッフとともに「テレビの職人」としてジャーナリストティックに活動し続けて行きたいと思います。日本記者クラブの皆様には、強い初夏の陽光をいただき、深甚より感謝申し上げます。

<sup>\*</sup>徳山ダムは岐阜と福井の県境に2008年秋完成。貯水量は日本一の6億6千万トン。ダム建設で徳山村が全村水没。廃村時に村人が水資源開発公団と交わした道路建設の約束が守られていない。

あぶの・かつひこ 1959年1月生まれ。静岡県出身。同志社大学文学部社会学科卒。81年東海テレビ放送入社。報道局アナウンサーからドキュメンタリー制作の現場に移り、報道局長などを経て、07年から現職。主な番組に「村と戦争」(95年ギャラクシー優秀賞・放送文化基金賞優秀賞)、「とうちゃんんはエジソン」(03年ギャラクシー大賞)、「約束〜日本一のダムが奪うもの〜」(07年地方の時代映像祭グランプリ)、「裁判長のお弁当」(08年ギャラクシー大賞)、「光と影〜光市母子殺害事件 弁護団の300日〜」(08年日本民間放送連盟賞最優秀賞)など。



### 民主党代表候補討論会 (5.15)

友愛  
 岡田克也  
 政権交代



美しくないノーサイド 総裁選・代表選、何度も  
 司会をしてきたが、「政策の違いはそうない」「岡  
 田さんの思いは私の思いと一致しておりまして、  
 デイバートにならないかもしれないが」と、のっ  
 けから言われてしまうと…。もちろん微妙な違い  
 は出てきたのだが、小沢前代表や参院の呪縛、「壊  
 さない」「民主党のPR」の前では、ともに奥歯  
 にももの抉まったような議論に終始。故に感想は  
 「力の限り闘わなかったノーサイドは美しくない！」  
 総合司会 川戸恵子 (TBSテレビ)

代表選の真の主役 「消費税を議論することまで  
 封じるのはいかがか」と鳩山発言に異を唱えた岡  
 田候補。郵政選挙の惨敗を想起させ、当時の岡田  
 代表の対決姿勢の欠如を暗に批判したかのような  
 鳩山候補のアプローチ。挙党体制を装いつつも、  
 火花は確かに散っていた。しかし、肝心の小沢問題  
 は、直接討論ではどちらも触れず。それが、代表選  
 挙の真の主役が誰であるかを雄弁に物語っていた。  
 第1部司会 影山日出夫 (NHK)

問われる消費税 「財源なくして政策なし」。鳩山  
 由紀夫氏と岡田克也氏の「違い」がもっとも明確  
 だったのは民主党の最大の弱点といわれる政策の  
 財源問題だった。鳩山氏が「4年間は消費税を引  
 き上げる議論すらすべきでない」と言い切ったの  
 に対し、岡田氏は冒頭の言葉で政権を奪取した場  
 合に財政に責任を負う考えを明確にした。歳出見  
 直しだけで膨大な政策経費を捻出できるのか。政  
 権公約で再び問われるところになるだろう。

代表質問 原田亮介 (日本経済新聞)

滝鼻理事長・開会のあいさつ 昨夜から各放送局に出演されたお二人の発言を聞いておきますと、もう、すでにあと数カ月以内に確実に行われる総選挙を強く意識された発言が目立ちます。それだけに本日の討論会と質疑応答は、すべての有権者が強い注目を持って聞くはず。どうかその点を意識されて、自由闊達な討論を展開していただき、実りある質疑応答にしてください。



左から 代表質問の原田（日経） 橋本（読売） 倉重（毎日） 宮田（朝日） 第1部司会の影山（NHK）の各企画委員

▲最後に、理事長がクラブのネクタイを記念に贈った。「お二人の話を聞いてもうひとつ違いが分からないという印象を持ちましたが、ネクタイの色の好みははっきり分かれました。岡田さんは、脱炭素社会を象徴するグリーンを、鳩山さんは「友愛」の愛を象徴する赤いネクタイをお選びになりました」

18ページに関連記事  
写真・栗田格委員

▼民主党議員になったつもりで討論会を聞いた。岡田克也氏には論破されそうな気がする。鳩山由紀夫氏は話の内容は乏しいが、人柄は良さそう。小淵元首相を思い出し、「人柄の鳩山」「真空代表」という言葉が浮かんだ。「剛腕」なしで寄り合い所帯をまとめるには、無難な選択かもしれない。首相の資質とはまた別の話だが。

読売新聞政治部 穴井雄治

▼通信社に頼るばかりでは情けない。とはいっても、ふだんは地元選出の議員を中心に取材する。両候補に直接的な接点もない。地元議員の声でまとめるか。いや解説くらいは書かせたい。そこへ討論会の案内。おそらくすべての地方紙が思っている。開催に尽力していただいた企画委員に感謝します。

京都新聞東京支社編集部長

向井 康

▼もし政権交代したら日本はどうなるのか？と世界が注目する中、候補者のビジョンが十分伝わってこなかった。政策の違いがないので討論にならないと候補者自身が認めてしまいう生温さ。党内人事など内向きの質問が多く、アジア外交や環境問題についてほとんど語られずに終わった

のは残念だし、自分を含む会場にいた記者全員の責任だと思う。

ライター記者 西川洋子

▼鳩山・岡田両氏とも冒頭から「考へは全て一致」「挙党体制で政権交代」と強調し、討論というより民主党のアピールの場になったというのが率直な印象だ。テレビを意識していると思っただのは鳩山氏だ。「友愛社会を作りたい」と公言しているだけに、友愛を表すと自身が言う深紅のネクタイでの登場だった。しかし「友愛」はまだ国民には分かりづらい。どんな社会なのか、より具体的な説明を期待したい。

フジテレビ政治部 森 守弥子

▼クラブの討論会を何回も撮影してきたけど、今回がいままで撮った枚数が一番少ない。両氏とも表情がちっとも変わらず、魅力なし。来日中だったブーチン首相。経団連のフォラムでたった20分だったけど、500枚シャッターを切った。目の動き、口の動き…何かを感じさせる。パリ本社やNYから日本の政治家の写真要求もないし配信した写真への反応がないのも淋しい。「蟹工船」が話題というので共産党関連がほしいというのにはまいったね。

ガンマプレス(写真通信社) 栗田 格

おかく 信彦 国立感染症研究所  
感染症情報センター長

5・8(金)研究会「豚インフルエンザ」  
司会 宮田一雄委員 出席 166人

正しく怖がること



なにをさ  
ておいても  
パニックを  
防ごう、と  
の呼びかけ  
が岡部氏の  
メッセージ

であった。特に「政治、行政、医療、メディア」判断者がパニックにならないこと」と強く訴える。

もつともであるが、国内の患者が急増し始めた場合、さらにいわゆる第2波が襲来した時に、はたしてどのような見出しやニュースが溢れるのだろうか。社説や記事に「冷静に対応を」といった文言が繰り返し見つけられたのは、過去の経験からじみ出るメディアの自戒の念も込められていよう。

岡部氏は、感染の形態、予防、流行規模の想定、抗インフルエンザ剤の使用方針など、新型インフルエンザに係る全体像を研究会で描き出した。一方でたとえば食品を通しての感染の可能性について「インフルエンザは呼吸器の感染症。たとえ胃の中

にウイルスが入ったとしても胃酸で不活化する。それでも心配なら加熱すればいい」と、素朴な疑問にも答え

て「手洗いを励行して、症状のある人はぜひマスクを」など、一人一人が守るべきこと、協力するべきことに言及。「抗インフルエンザ剤は治療のために使用することが最優先。取材に行くからといって予防のために飲むのはやめてほしい」とくぎを刺しつつも「しかし熱が出たらすぐに飲んでください」とフォローした。

新型インフルパニックを防ぐ、という記事が5月2日の読売新聞朝刊に掲載され、「正しい情報 知的ワクチン」と袖見出しにあった。記事に登場した、災害・リスク心理学が専門の広瀬弘忠・東京女子大教授のことはである。

その「知的ワクチン」を岡部氏は研究会で我々に大量投与したのだ。そのうえで「薬の備蓄や国内の医療体制も整いつつある。むやみに怖がらず、正しく怖がること」と結んだ。見えない敵に対する不安は払しょくしきれないが、なすべきことに臨む心構えは、はつきりと見えてきた。

読売新聞出身

西井 芳夫

たばた 伸一郎 北海道大学  
スラブ研究センター教授

5・11(月)研究会「ロシア経済の現状」  
司会 宮田謙一委員 出席 74人

ロシア経済を過度に悲観するな

ロシア経済は昨年夏まで絶好調だった。ところがその後、世界金融危機の直撃を受けて一気に落ち込んだ。落ち込み方はほかの新興経済国に比べても大きく、田畑教授も「これほどまでに」と驚いたという。

だが、教授は過度に悲観的になる必要はないと強調した。危機が進行中はえてして悲観論が優勢になりがちで、それが無難でもあるのだが、そうした傾向に異を唱える見解は新鮮だった。

ロシア経済は昨年秋から急降下、今年第1四半期のGDPは前年同期比マイナス9・5%だった。通貨ルーブル安が進行、株価は暴落した。

今後の見通しも厳しい数字が並ぶ。ロシア政府は今年のGDP見通しを1月にマイナス2・2%と発表したが、4月には一気にマイナス6・0%へ下げた。

これに教授は疑問を



呈した。今年2-3月からはルーブルが持ち直し、資本流出や外貨準備の現象に歯止めがかかり、経済に改善の兆しが現れた。「それなのになぜ大幅下方修正なのか」。

教授によると、ロシア経済を左右するのは原油価格とルーブル相場。このうち原油価格は今1バレルあたり40-50ドルで推移している。この水準はロシアにとって「決して悪い数字ではない」。

さらにルーブル安が進んだため今後は輸入代替による成長が期待できる。つまりルーブル安で輸入が減り国内品の競争力が強くなって国内の産業活動が活発になるという見方だ。これに財政出動が加わる。だから「私は楽観的に見ている」。

今回の危機は改めてロシアの原油依存の大きさを浮き彫りにした。教授が講演した日、プーチン首相が大勢の経済人を引き連れて来日し、日本からの幅広い分野の投資を呼びかけた。外国からの投資を経済多角化に役立てたいという思いもこめられているのだろう。

日本経済新聞編集委員

小田 健

あかし やすし  
**明石 康** スリランカ平和構築及び  
 復旧・復興担当日本政府代表

5・12(火) 記者会見 司会  
 中井康朗委員 出席 43人

▼政治和解がカギに変わりなし

スリランカで4半世紀余り続いた武装ゲリラ「タミル・イーラム解放のトラ(LTTE)」と同国政府軍との内戦は、政府軍がLTTEを武力制圧して、最終的に決着した。

会見は、制圧の4日前、独立を求めるLTTEが5万人に上る一般住民を「人間の楯」に立てこもる土壇場の緊迫した中で行われた。

スリランカの平和構築を目指す日本政府代表として7年目を迎えたこの人は、会見の冒頭に「内戦は最終局面を迎えたと言つてよい」と断言した。果たして事態は、その通りの展開になった。さすがはスリランカ情勢に通じた日本代表である。

今年1月の通算16回目のスリランカ訪問では、「自爆テロの元祖」LTTEの幹部から、スリランカ政府



に停戦の意向を取り次いでほしい、と申し出を受けた。が、時すでに遅し。制圧可能と踏んだ政権側に、和解に応じる意思はなかった。

4月下旬から5月の17回目の訪問では、ラジャパクサ大統領領ら関係者と話し合った。自ら「奥歯にものが挟まったよう」と断つたが、欧米諸国と人権団体が、問題を国連の場で審議しよう求めたのに対し、国際紛争解決の「匠」は、アジア的アプローチを粘り強く模索した。

穏やかな口調の会見の中で、自らの信念を語る瞬間があった。

「軍事的解決はあり得ない。一時的にせん滅されても、また治安を乱すだろう。政治的な解決が必要だ」

武力制圧が成功しても、人間の心までは制圧できまい。相手が納得する解決でなければならぬ。カンボジアや旧ユーゴスラビアの紛争解決の体験に基づく思いなのだろう。

少数派タミル人と多数派シンハラ人社会との間の深い亀裂は、さらに拡がった。スリランカ和平第2幕、国民和解と復旧・復興に向け、またこの人の出番が回ってきそう。

読売新聞論説委員 濱本 良一

ローレンス・キャノン  
**カナダ外相**

5・14(木) 記者会見 司会 会田弘毅  
 委員 通訳 西村好美 出席 58人

▼外相はPRマン

ある国の首脳や外相が外国の首都を訪問し、その国のナショナルプレスクラブで会見する。彼らにとつては自国とその外交政策をPRする場である。PR能力が問われる。

質問する記者たちも、視野の広さ、方向、深さなどの様々な角度から対外的関心のありようを実は試験されていく。2国間問題だけ、あるいは特定の問題だけに質問が集中すれば、それがその国のプレスの視野の実態を示す。先方はそう見る。

この相互作用の観点に立てば、キヤノン外相の会見は、理想型に近かったように思えた。修好80年を迎えた日加関係を述べ、外交政策に話題を転じ、北極とアフガニスタンの2点に優先順位を置いていると説明した。PRマンを見事に演じた。

日加関係には新聞の一面を飾るような懸案はない。だから集まった記者の数もそれほど多くはなかった。



それがかえって良かった。アフガニスタン、G8、ミャンマー(ビルマ)、ロシアと幅広い質問が出た。

アウン・サン・スー・チーさんに異変が起きているミャンマーに対する回答を避けたのは残念だったが、G20との関連で問われているG8のあり方については「アーキテクチャー(構造物)よりも問題を前進させるのが重要」と述べた。枠組み論議が好きな日本のメディアに対する間接批判とも聞こえた。

カナダの外相だから、こういう雰囲気の見え方が可能だったのだろう。もしアメリカの國務長官だったら、記者の数も多く、質問者は実はあらかじめ決まっていた……といった形式主義に陥る危険があった。最近の当クラブでの大物会見を見ているとそんな気がする。最後はカナダに関係ない話でした。

日本経済新聞論説副委員長

伊奈 久喜

佐野 眞一 作家

5・15(金) シリーズ研究会「雑誌・ネット・報道」① 司会 原田亮介委員 出席 75人

▼編集者の劣化を憂う

企画委員会では雑誌メディアで最近相次いだ不祥事を踏まえ、新たな研究会をスタートした。報道はなぜ揺れるのか。

「どぶに落ちた犬を救い上げてタオルでぬぐってやっていると思ってるのに」。佐野さんは冒頭から新潮社の対応に無念さを隠そうとしなかった。朝日新聞阪神支局襲撃事件を巡る週刊新潮の「虚報」。佐野さんは自らも雑誌を舞台に綿密な取材で労作をものしてきただけに、誤った記事がチェックを素通りして掲載された経緯に深い疑問を抱いている。自らの手でなぜ暴走したのかの真相を明らかにしたい、とキツパリと語った。奈良の少年事件を扱った『僕はパパを殺すことにした』（講談社刊）でも、供述調書を直接引用しないと約束しながらそれを反故に



し、取材源として秘匿すべき情報提供者を法廷で明らかにした著者と、出版元を

厳しく批判。「人を見抜く心眼がない。編集者の劣化だ」と話した。

雑誌業界では総合誌や論壇誌の休刊が相次いでいる。フリーのライターは仕事の舞台がどんどん失われている。「ふるさとに帰って家業を継ぐ」と廃業宣言をする人も多いと聞く。そんな折だけに出版社側が読者の信頼を裏切るといふ行為はとも見過ごすわけにいかないのだろう。雑誌『世界』への寄稿にはこうある。「経済的に恵まれないなかで地を這うように取材し続けている人たちは世間にどんな顔向けをしたらいいのか。著者と版元はまず真剣にノンフィクションの仕事に取り組んでいる人たちに謝ってほしい」

講演後、会場から「編集者が劣化しているというが、どう記者を教育すべきか」という質問が出た。佐野さんは「言葉が出なくなるような、例えば子どもを亡くした母親が泣き叫ぶような『現場』を体験させること。金魚のフンのような総理番をやらせていたら記者はすぐダメになる」と答えた。耳の痛い警句である。

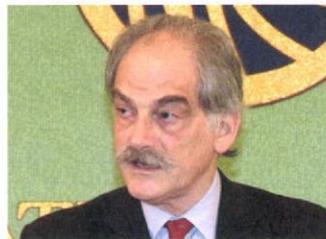
日本経済新聞東京本社編集局次長

原田 亮介

ジョン・リップスキーク  
IMF筆頭副専務理事

5・18(月) 記者会見 司会 広瀬和彦委員 通訳 池田薫 出席 49人

▼「強面」からの変化に期待



世界的な金融危機を受け、国際通貨基金(IMF)は変身中だ。97〜98年のアジア通貨危機の際、厳しい

構造改革の要求を突きつけたのに十分な効果が上がらず、被支援国から批判を浴びた。いま、その「強面」はすっかり鳴りを潜める。「IMFは自ら改善し、危機から良い結果を引き出さないといけない」というリップスキーク氏の言葉が、IMFの変貌ぶりを象徴していた。

IMFには「危機を未然に防ぐための道具立て」が不足していたという。今年3月、新たな融資枠を設けた。被支援国がIMFの厳しい要求を恐れて支援要請をためらわないよう、融資条件を緩めたのだ。早めに支援要請をしてもらえれば、危機の拡大を抑えられる。

「こうした道具立てを97〜98年(のアジア通貨危機のとき)に持ってい

たら、成果を上げられただろう」と、素直な反省の弁も出てきた。

5月に増額が決まった東アジアの通貨スワップ協定「チェンマイ・イニシアチブ(CMI)」については、IMFの機能を補完する意味で「新たな協力の道ができる」と歓迎した。ブロック化の動きに連動することに、はくぎを刺したものの、アジア通貨基金(AMF)のような考え方も、否定はしなかった。

世界はますます相互依存が強まっている。地域的な金融協力の枠組みとIMFの施策が連携しなければ、深刻な危機には対応できないという考えがにじみ出ている。

いまでは、融資条件が甘過ぎると構造改革を促さないという批判も出るくらいだ。それほど、IMFは自らの存在意義と立ち位置を定めるのに試行錯誤しているのかもしれない。「IMFは新しい世界の現実に迅速に対応していく」と、リップスキーク氏は結んだ。今年いっぱい、世界は厳しい経済状況が続くそう。中東欧など不安定な地域もある。「変化」の成果を注視したい。

朝日新聞グローバル記者 野島 淳

## コニー・ヘデゴー デンマーク 気候・エネルギー相

5・18(月) 記者会見 司会 船橋  
洋一企画委員長 通訳 澄田美都子  
出席 80人

### ▼日本は野心的な中期目標を

「日本の温室効果ガス排出削減の中期目標は、野心的なものでなくてはならない」。政府、国民へのメッセージは、この言葉に尽きていた。

ヘデゴー氏は、今年末の気候変動枠組み条約締約国会議で議長を務める予定だ。この会議で各国は、京都議定書に続く地球温暖化対策の国際枠組みの合意を目指す。

次期枠組みの削減義務は、日本を含む先進各国の中期目標と密接に関連するため、国内の目標の議論が本格化している。さなかの来日は、国際交渉を見据えた絶妙なタイミングだった。半日ほどで環境、経済産業、外務の各省を回ったほか麻生太郎首相と会談、日本経団連とも意見を交わすという精力的日程で、歴史的会議を成功させたいとの強い意欲と、タフな交渉者の顔をのぞかせた。

国内の中期目標の議論は、温暖化をどの水準で、どう止めるのかとい



うことより、対策による経済影響が強調されるくらいがある。温暖化が進展すれば、被害額が対策費用を上回ることは世界の共通認識となりつつあるが、日本では、一部産業界が対策に伴う家計負担などを前面に押し出し、京都議定書の目標より大幅に緩い「4%増にすぎない」との主張を大合唱しているのが現状だ。

ヘデゴー氏も、そんな産業界の動きは「先刻承知していた」（日本政府関係者）といい、会見で「4%増の目標は、21世紀の世界で成り立つものではない。日本のリーダーシップに促している水準だ」とくぎを刺した。「対策を先延ばしにすればするほど未来の世代へのつけが高くなる」とも述べ、われわれが次世代にどう責任を果たすのが問われていることを指摘した。

麻生首相は「6月半ばに目標を発表したい」としている。この会報が出るころ、日本の温暖化問題への責任と覚悟が明らかにになる。

共同通信科学部

樋口 明

## 上坂 昇 桜美林大学教授

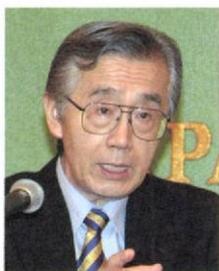
5・19(火) シリーズ研究会「オバマのアメリカ」⑥ 司会 会田弘継委員  
出席 56人

### ▼宗教右派からみた米国の変化

もつとも早い時期からアメリカの宗教右派勢力に注目してきた人だ。25年も前に「現代アメリカの保守勢力―政治を動かす宗教右翼たち」(ヨルダン社)という本を書いている。超大国を独特の視点で見つめてきた。近著「神の国アメリカの論理―宗教右派によるイスラエル支援、中絶・同性結婚の否認」(明石書店)は各紙書評で高い評価を得た。

その上坂教授を迎えての「オバマ研究会」は、活発な質疑応答となった。依然、宗教右派と呼ばれる勢力への関心が高いことを示しているようだ。

上坂教授によれば、宗教右派には世代交代が起きている。ジェリー・フォルウエル、バット・ロバートソンといった70年代から活躍してきた指導者らが死去したり、表舞台から去ったりし、代わって若手指導者らが登場。若い宗教右派の人



たちの関心領域も変わってきた。

これまでは人工妊娠中絶や同性愛結婚が主な関心の対象だったが、最近では環境や貧困問題への関心が高まっているという。彼らは、神が創造した大自然を破壊する行為、困窮に陥った隣人を放置する行為は信仰上、許してはならないと考える。

上坂教授の説明には「宗教左派」いう言葉も出てきた。貧困問題などを軸に、社会正義の実現を強く求めていくような熱心なキリスト教徒は、そう呼ぶのがふさわしいのだろう。オバマ大統領はそうした人々を取り込み、その力を借りて貧困撲滅などの政策実現を図ろうとしているという。革新的なキリスト教徒たちの力を借りていくために、ホワイトハウスに専任の担当者も置いている。

オバマ大統領自身も信仰生活で「生まれ変わり」(ポーンアゲイン)的な体験があるという。考えてみれば、カーター元大統領も信仰のあついな人だった。アメリカ政治を考える時は民主・共和いずれの政権でも、宗教問題を避けて通れないようだ。

共同通信編集委員室次長

会田 弘継

おかた かつや  
**岡田 克也** 民主党幹事長

5・20(水) 記者会見 司会 影山日出夫委員  
出席 100人

▼選挙は小沢氏—さて幹事長は:

ゲスト帳には「大器晩成」と揮ごうした。つい5日前の当クラブでの代表選討論会では「政権交代」だった。幹事長ポストに落ち着いたことで改めて期するところがあるのか。

ブレゼンテーションは、世襲規制、企業団体献金禁止の政治改革論。後者については3年間の猶予を設けその間に税額控除制度などを新設し、個人献金への移行をスムーズに進めたい、という。

それはそれ。是非やってください。とばかり、やはり、質問は選挙担当の筆頭代表代行に収まった小沢一郎氏を、幹事長としての岡田氏がどう使いこなすか、特に選挙実務をどうすみ分けするか、に集中した。

これに対する岡田氏の回答は、①自民党と異なり民主党では党首が選挙に責任を持つ②その党首の下で小沢代表が選挙の実務を任せられた③幹



事長は選挙情報は共有するが、政策、国会対策が主務となる——というもので、あっさり「選挙は小沢氏」を認めた形となった。

小沢氏の西松建設虚偽献金事件については、「何に使っていたのか、申しあげた方がいい、とはアドバイスした。代表を辞めて状況が変わったが、そのへんは説明した方がいいと思う」と明言した。

「頭の体操」として総選挙後の政界再編の可能性をたずねる質問に対しては、愚問とばかり「だって(民主党で)過半数取ればいいんでしょ。頭の体操している時期ではない」とバツサリ、「自民党はバラバラになってもらいたくない」と「野党自民党」に対しても注文をつけた。

全般的に自信満々。にこやかに受け答えるが、理路整然、必要以上のサービスはしない。代表選での「95票の壁」を突き破る自己改造はしないのか、との質問には「人間ってそんなに変われませんから:」。

毎日新聞論説副委員長

倉重 篤郎

ふるはた てつや  
**古幡 哲也** 石油天然ガス・金属鉱物資源機構石油開発支援本部調査役

5・22(金) 研究会「カスピ海のエネルギー資源」司会  
石郷岡建委員 出席 34人

▼カスピ海パイプライン・ビジネス

世界のエネルギー上流部門の調査を専門とする古幡さんは、カスピ海周辺に雨後のタケノコのごとく計画されているパイプラインの進捗状況を「どれも船頭多くして舟、山に登るようなことが多い」と言う。

カスピ海は日本とほぼ同面積の世界最大の塩湖だ。キャビアだけでなく、日本の教科書にも載っているバクー油田によって石油生産でも知られてきた。近年は、石油・天然ガスの埋蔵量が、ペルシャ湾、シベリアについて3番目に大きい(1、2位とは差があるが)ことが確認されたため、注目を集めている。

一昔前は、ソ連とイランにはさまれた湖という認識だったが、ソ連解体により、沿岸にアゼルバイジャン、カザフスタン、トルクメニスタンの3国が誕生し、複雑になった。海底(湖底?)の資源は誰のものか、誰が開発・生産するのか、どの国を通過してどこ(買い手)の方向にパイプラインを建設するか、などなど。研究会後の出席者の反応は「新聞記事を読んでもなかなかピンと来



なかつたが、ようやく理解できた」とおおむね好評だった。ただ、今後の予測

は難しい。そういう中で、東つまり中国に向けたガスパイプライン整備は急テンポで進んでいると古幡さんは指摘。こちらは、船頭が少ないから、ビジネスとは別の国家の意思が感じられるという。

一般論だがロシアをめぐるエネルギー報道と専門家の見方は微妙に違う。地政学的視点や売る側の強引な振舞いを強調する報道が少なくないが、専門家は冷静に見る。「売る側も買い叩かれないよう苦慮」「パイプラインを計画しても、安定した供給源と買い手の両方を確保しないとファイナンスがつかない」。欧米は供給源とパイプラインでつながっている。石油も天然ガスも船に乗ってやってくる日本でパイプラインビジネスを理解するには、このようなブ

毎日新聞出身

今井 伸



佐藤 博樹 東京大学教授

5・22(金) シリーズ研究会「雇用問題」  
司会 宮田謙一委員 出席 36人

▼働き手に必要なキャリア形成

「派遣村」以降、雇用問題の象徴となっている派遣労働。厚生労働省研究会などで活躍する佐藤さんが、海外と比べながら、論点をまとめた。

ハケンハケンと日々ニュースで見聞きすると、派遣労働者がかなり多いと思いがちだが、実は労働市場の2〜3%。非正規雇用者だけでみても1割未満だ。国内では1985年に労働者派遣法が制定された若い市場である。

派遣労働の歴史が比較的長い欧米の制度(フランス型、ドイツ型、英米型)と比べながら、佐藤さんが「日本にも法規制が必要」と強調したのは、派遣スタッフと派遣先社員との差をなくす「平等取り扱い(均等ルール)」のみ。そして、日本ほど業種や職種、期間を法令で規制する国

は少ないとして、「均等ルールは取り入れるべきだが、あとは緩和するべきで

ないか」と言及。そして、労働者派遣法改正で野党共闘案が出ているように「派遣」という働き方そのものに対する批判が強いことに対しては、「プラスマイナスの両面があり、実証的な検証が必要だ」とくぎを刺した。

どの企業も、市場の不確実性が高くなる中では、長期の固定的な雇用契約を結びたがらなくなる。短期間のスキル提供はますます需要が増すだろう。派遣がその役割を担う可能性はあるのではないか。

しかし、問題となるのは、派遣会社の機能だ。スタッフの能力を適切に評価し、派遣先に対して適切配置を求める交渉力があるか、スタッフ一人ひとりのキャリア形成を計画的に行えるかだろう。

正規社員もいまや雇用不安にあり、不況期にキャリア教育が疎かになるのは同じだ。この日の研究会では触れられなかったが、派遣会社、そして、派遣先の企業がともに協力しあい、正社員・派遣社員の教育訓練に取り組むことが必要だろう。

朝日新聞論説委員

岡本 峰子

緒方 貞子

国際協力機構理事長

5・25(月) 昼食会 司会 宇治敏彦  
副理事長 坂東賢治委員 出席 102人

▼新生JICA―国づくりへの貢献

日本の「顔」が見える国際貢献に大きな比重を占める援助、それを一元的・総合的に実施する新JICA(国際協力機構)が発足して8カ月。大組織を率いる緒方理事長が、その成果と課題を説明した。



「援助効果」を生身の人間ひとり一人が実感できる。Bigger & Betterの精神を基礎にする援助。

技術協力・円借款・無償資金協力を三位一体で運用し、いかに効果的な援助を推進するか。地道な援助で挙げた「点」の成果を、いかに「面」に広げていくか―等々。所信の一端を披露した後、相互依存増す今日、「国平和主義は、もはや世界に通じない」と、きっぱり言い切った。

現場主義を貫く緒方氏の活動範囲は実に広い。この間の行動を振り返ると躍動感が伝わってくる。新JICAの最重要課題の一つ、アフガニスタンの国づくり支援。発足後1カ月余、首相特使としてカブールに飛んだ。その後もアフガン・パキスタン支援の包括戦略を調整するため訪米するなど、4月のパキスタン支援国会合の成功をお膳立てした。

昨今、経済成長の勢いと力まかせの物量作戦でハコモノ建設や大規模援助を実施する大国が現れるなか、日本の流儀は「援助効果」を生身の人間ひとり一人が実感できる。Bigger & Betterの精神を基礎にする援助。

緒方氏は、農業、保健、教育、コミユニティ開発など、現場で地道に積み上げてきた実績と活動を知っていただきたい、アフガンのみならず世界各地の平和構築・復興支援の現場で汗する日本人の姿をぜひ見ていただきたい、と訴えた。

2003年、ブッシュ米大統領(当時)が空母エイブラハム・リンカーンの艦上からイラク戦の勝利を意気揚々と宣言してちょうど6年。

ニューヨークで筆者が主催したセミナーで緒方氏の力説した言葉が蘇った。「国づくりというのは一朝一夕にできるものではない。人の心の中には怨念から欲望に至るまでずっしりございましょうから、アメリカには(戦後イラクの国づくりに)じっくり取り組んでいただきたい」。

時事通信解説委員

鈴木 美勝

はっとり みちたか  
服部 倫卓 ロシアNIS貿易会  
経済研究所次長

5・27(水) 研究会「経済情勢  
ウクライナ、ベラルーシ」司会  
石郷岡建委員 出席 31人

▼旧ソ連2カ国の経済・政治情勢

大統領の名前に「エンコ」がつく旧ソ連諸国がいま、勢力圏をめぐる欧州とロシアの綱引きの場となっている。1つは「欧州最後の独裁者」ルカシエンコ大統領率いるベラルーシ。もう1つは「オレンジ革命」の立役者、ユシチェンコ大統領率いるウクライナ。研究会では、現地に滞在した経験や様々なデータをもとに、両国の経済情勢や政治状況が詳しく説明された。

2国は別々の道を歩んでいる。ベラルーシは今も、社会主義時代の国営経済を維持しており、GDPに占める民間部門の比率は30%しかない。「市場経済化では落第生」だ。ルカシエンコ大統領がロシアへの依存度をさらに高め、独立後の不況からいち早く経済を回復させたが、「昔のやり方を引きずったままで、新技術導入や設備の近代化は置き去りになっている」という。

一方、ウクライナは独立後、欧州の仲間入りを目指した。しかし、現状を「経済危機、エネルギー危機、政治危機が同時進行しており、これ

だけ悪い条件が重なっている国も世界でも例が少ない」と説明。特に、政治情勢については、「流動化よりも液状化だ」と指摘し、「政治家はこの危機を一致団結



して乗り越えるよりも、政敵を引きずり降ろすことに終始している」と解説した。

欧州連合はいま、両国と「東方パートナーシップ」を組み、ロシアのくびきから離脱させようともくろんでいる。しかし、両国にはロシア系住民も多く住んでおり、今後の欧州との関係について、「ロシアを敵にまわしたままでは大きく進展しないのでは」との見解も示した。

2012年、ウクライナではポーランドとの共催でサッカー欧州選手権が開催される予定だ。「危機が続けば権利が剥奪される恐れがあり、選挙権の開催はウクライナ経済が回復したかどうかの目安になる」と指摘したことが非常に興味深かった。

産経新聞外信部 佐々木正明

つじい たかし  
辻井 喬 作家・詩人

5・29(金) 総会記念講演「21世紀の日本文化」司会 斎藤史郎理事長  
出席 14人

▼日本文化に誇りを持ってこそ

財界人である前にまず詩人として、社会、メディア、変わりゆく自分自身へ、懐疑の視線を向けてきた。その人が語る日本文化論は、戦後史の立役者から手渡されたいくつかの回顧談から始まった。

「軍隊を持たずに国を再建せよというアメリカ側の提案を受けた時、吉田茂は膝を打って喜んだ。これで復興が早まる、と」。縁続きだった白洲次郎、首相の息子で友人だった吉田健一の両氏が、辻井氏にそう語ったという。

長年、教えを受けた丸山真男は、「自立思考する大衆が戦後いつこうに育たなかったことに、深く絶望していた」とも明かした。そして池田勇人首相の「所得を倍増して皆で幸せになろうという、岸内閣からの政策転換ほど、民心をさらった例を私は知らない」。

第二次大戦の呼称、60年安保闘争の評価など



の諸問題をあやふやにしたまま幕を開けた、日本の大衆消費社会。百貨店やリゾート施設を経営したセゾングループ元代表の辻井(堤清)二氏自身も、大きな役割を果たした。その時代の幅広い活躍は、読売新聞に連載された『叙情と闘争』にも詳しい。だが、「地域、職場、労働組合等、国と個人をつないでいた共同体が消滅し、今ほど文化が衰弱した時代はかつてない」と憂える。共同体の消滅と同時に、思想と生活感覚のズレ、敗戦後続く伝統との断絶も、文化を後退させ、日本を不可思議な国にし続けている原因とみる。

「元々日本人は文化、芸術の能力が高いのだから、まず、その分野で誇りを持った上で、アメリカ、中国などへの理解をこちら側から深めるよう、努力が必要です」。その上で初めて「経済、軍備も生きてくる」と語る。

文化が衰弱したまま、世界同時不況という「長いトンネルを抜けると……」「雪国」ならまだしも、「そこは異次元だった、となるかもしれない」。淡々と、しかし怖ろしい詩人の予言でしめくくった。

読売新聞文化部長 尾崎真理子

## オタクの聖地 事件から1年

アキバ記者

## サブカル最前線を追って

▼安岡 一成

(産経新聞社)

悪夢のようなあの日から8日で丸1年。昨年6月8日、東京・秋葉原で17人が死傷した加藤智大被告による無差別殺傷事件は「オタクの聖地アキバ」の風景を一変させた。

「こんなことがあっていいの……」。救急車のサイレンが鳴り響き、血の海が広がった現場を走りながら、理不尽としか言い表せない惨劇に自問自答していた。一方で「起こるべくして起こったのでは」との思いも消せないでいた。

## 連載に100万件のアクセス

電気街・秋葉原がブレイクするきっかけは、2005年の「電車男」ブームだった。街のあちこちにピラ配りのメイド服姿の女性が立ち、週末の歩行者天国には音楽やダンスのパフォーマーだらけ。ビルの壁には巨大なアニメ画がかかり、ショーウィンドーにはたくさんのフィギュア。確かに、魅惑の園だった。

「この街から発信するニュースなら、たくさんの人に見てもらえるはずだ」。初めて秋葉原を歩いてこう直感した。すぐに弊社ニュースサイト「MSN産経ニュース」の独自コンテンツとして、メイドカフェやコスプレなどアキバ文化を紹介する企画「サブカル最前線」を始めた。毎週末の連載には数十万〜100万件のアクセスをいただいた。

## 乱れるホコ天にうんざり

しかし、半年がたつころ、ホコ天の雰囲気は違和感を覚えてきた。奇抜な衣装の若者たちをカメラを持った通行人が取り囲み、歩行が困難になるほどの人だかりができる。低位置から女性のスカート内を狙う見苦しい姿もあった。エアガンを撃ち合う集団やカメラ小僧の前で開脚して下着を見せつける女性まで登場する始末で、風紀は乱れきっていた。

原因は警察の取り締まりの手薄さ

につけこみ、アキバ文化とは無縁の人たちが「ここなら何をやっても許される」とばかりに押し寄せたためとされる。目立ちたい人とハブニングを期待する人たちの異様な熱気と興奮にうんざりしながら、ホコ天を歩き続けた。目的はもはや「興味」から「警戒」に変わっていた。

4月末、先述の女性が都迷惑防止条例違反容疑で警視庁に逮捕されたことを機に、地元住民はパフォーマーの撲滅パトロールを開始。打って変わって平穏になった。

## 秋葉原の持つ底力に期待

事件が起こったのはそんな矢先のことだった。嫌な予感は最悪の形で



事件前の2008年4月、カメラを持った人たちが賑わうホコ天（筆者撮影）再開はいつか…

的中してしまった。

事件後、献花台はアニメ画やフィギュアなど独特の供え物でいっぱい。コスプレ姿で手を合わせる若者もおり、同好の士を弔う「アキバ葬」の様相を呈していた。

これに対し、地元は複雑な思いだった。奇抜な衣装でホコ天をわが物顔で闊歩した若者たちに対する不信感は根強かった。飲食店の店主が吐き捨てた。「オタクが秋葉原をアニメなど趣味の街に塗り替えて大騒ぎしなければ、オタクの加藤（被告）は絶対に来なかった」。しかし、若者たちは「事件とホコ天は関係ない」と口をそろえるのだった。

現在、ホコ天再開のめどは立っていない。最近ではメイドカフェも閉店が相次ぎ、観光客もピーク時からぐっと減少。不況も重なり、沈滞ムードは否めない。しかし、連載取材で気付いたことは、秋葉原には何かしら面白い物や流行を生み出す底力があるということだ。

こんなに小さな街なのに、半年間、私が一度もネタに困らなかつたことがそれを証明している。無秩序ではなく、この底力で再び輝きを取り戻してほしいと思う。

やすおか・いっせい 2003年入社 大津 舞鶴支局を経て2007年東京本社 社会部・遊軍 都内版担当

# 昭和47春闘を一決 黄門様の深夜電話



佐沢 利和

連執行部が秘中の秘、最後の切り札として考えたのが、黄門様の担ぎ出しだった。

## ●労働問題にも関心の福田外相

3月16日夜、もう零時に近かった。私は当時、霞クラブ（外務省）のキヤップだった。受話器をとると、鉄鋼労連の中村君だった。

「何としても聞いてもらいたい話」が起きた。これから10分後に外務省正門前に車をつけるので、詳しくは会ってから……」

私と中村君は陸士の同期（61期）で数多の畏友の中の1人だった。それにしてもこんな夜半に、労政担当でもない私に春闘前夜に？首をかしながら3階の記者クラブから下り彼の車に乗り込むと、いきなり賃上げ交渉の状況を説明した後、組合要求の「前年並み」が通らなかつた場合の路線問題に触れ、「ここまで来た以上、福田氏に頼るほか道はなくなった。私邸に同道してくれ」というのだ。

労連が福田氏に白羽の矢を立てたのにはわけがあった。第1にこの秋にポスト佐藤で争われる自民党総裁選では福田外相が本命視され、財界にも絶対的な支持があつたこと。2

春闘の時期になると、あの電話を思い出す。茫々、40年近くも前、昭和47年（1972）春闘時の3月16日、時の外相福田赳夫氏（愛称・昭和の黄門）がその筋（たぶん、鉄鋼連盟会長のI氏だった）に、鉄鋼労連の賃上げ要求について再考を促す電話——おかげで、決裂寸前の労使交渉は、一夜にして経営側が大幅譲歩、組合要求を受け入れ妥結した。

この結果、労連執行部（宮田儀二委員長——中村卓彦書記長）が進めていた労使協調、生産性向上運動の右派路線も根付き、時とともに民間の全産業に波及して、日本は世界第2の産業大国へ巨歩を進める礎ともなつたのだ。

この年の日本経済はニクソンシヨ

ックから立ち直れず、鉄鋼業界は大手5社（新日鉄、日本鋼管、住友金属、神戸製鋼、川崎製鉄）社名は当時）が不況カルテルを結んで減産、旧型高炉はすべて休止している状態だった。

## ●内憂外患の右派執行部

こういう厳しい環境下での賃上げは至難とされ、労使交渉は難航に難航を重ね、労連側の「せめて前年並み」という最低限の要求もむなしく響くばかりで、経営側の最終態度決定日（3月17日）前夜を迎えた。

当時の労働界は総評と同盟が激しく対立、政党も階級政党論に立つ社会党が総評と、国民政党論の民社党は同盟と結びつく構図だった。鉄鋼

労連は組合誕生の経緯などから総評に属していたが、この数年前に執行部は右派が左派を抑えて、同盟路線＝労使協調、生産性向上運動（マル生）を推進していた。

いまでこそこの路線はごく当たり前で、すでに死語化しているほどだが、これに反対する総評の力は絶大。大宅壮一に「昔陸軍、いま総評」といわせたほどだった。その総評にながる左派は、春闘、賃上げの結果次第で組合執行部の奪還を狙っていた。

鉄は国家なり——に代弁されたこの時代、鉄鋼は基幹産業中の基幹で、春闘も、鉄鋼を一番バッターとして、他の産業はこれに追随するという図式だった。

内憂外患——窮地に立たされた労

番目は当時の自民党領袖の中では唯一人といっているほど、労働問題にも深い関心と理解を示していたからである。労働に目を向けるのは野党だけで、自民党は経営側のみ、とすみ分けされていた。

▲福田氏はこの年の暮れ、鉄鋼労連を含めた日本の主だった民間労組の代表と、「愛宕会」という私的懇談会を立ち上げ、会合を重ねる中で、数々の成果をあげていった。側近として常に出席していた塩川正十郎氏は、平成8年(1996)8月号の「文芸春秋」巻頭随想欄に「福田超夫先生と愛宕会」というタイトルで執筆、昭和48年(1973)のオイルショックで沈没しかけた「日本丸」を救ったのは、時の蔵相(田中内閣)福田氏と愛宕会協力の賜物だった——として師を讃えている▼

話を戻し、中村君の話聞いていた私は、前段まではたかがゼニ、カネの問題か、ぐらいに思ったが、後段の路線問題に移ったとき、放置できないと決めた。「福田のオヤジさんよ、起きていてくれヨ」——祈るように記者クラブにとって返し、ダイヤルを回した。今なら携帯電話を

持っているが。

もう17日の午前1時に近かった。受話器をとったのは御大、ご本人だった。

「ニッポン国のため火急の用件で、鉄鋼労連の中村書記長と一緒にうかがいたい」「ホウ、ホウ、いま寝ようとしているところだが、すぐいらっしゃい」。

### ●ニッポン国のため「マル生」を

第1関門突破!そう叫びたかった。会えさえすれば何とかなる。そんな期待に胸をふくらませながら中村君の車に飛び乗った。

氏はちやうど開会中の沖縄国会でのマル生運動をめぐる社会党対民社党のサヤ当てに、「ニッポン国の将来のため」とマル生の必要性を強調していたからだ。2人を乗せた車は世田谷の福田邸へと突っ走った。

パジャマにガウンをまとった福田氏は「もうみんな休んでいるので、お茶も出ませんヨ」といいながら2階の寝室に通してくれた。

シーンと静まりかえった中で、中村君は陳情の趣旨を説明、路線問題に話が及んだとき、じっと聞き入っていた氏の顔がひきしまるように、私には見えた。

大きくうなづいた福田氏は「さきに電話してみましよう。ホウ、ホウ」と言いながら、電話を隣の部屋に運びダイヤルを回しはじめた。

「目先の話ではなく、ニッポン国の将来につながる話ですから」「会社側の事情はよく理解しています。よろしく」

I氏とのやりとりが断片的に伝わってきた。私と中村君は手に汗を握りしめ、じっと待った。約30分後、「すぐに5社の社長会を開いて協議してくださいさうです。ホウ、ホウ」

ここまでくればもう大丈夫。私は胸をなでおろしながら深々と頭を下げ、辞去したときは、とつと午前2時を回っていた。

他ならぬ、黄門様の斡旋に鉄鋼連盟5社は未明の社長会を緊急招集、組合要求を受け入れ、前年並み(基本給6000円の引き上げと1700円の定期昇給計7700円)の賃上げを一決したのだった。ちなみに定昇分の1700円は、前年より200円近く高いのでこの年の総賃上げは「前年比200円アップ」という結果となった。

### ●小粒になった政・財界人

当時の新聞をめくると一夜の逆転

劇に驚きの見出しが躍っており、「会社側が労連の右派執行部に配慮した」との解説が多い。しかし最も重視されたマル生運動に踏み込んだものは見あたらない。いかにマスコミが表層的なものか、自戒を含めて考えさせられる。

と同時に福田氏に見られた卓見。政治の深淵さ。そして呼応した財界人たち——国家的大事とあれば即座に行動、決断した先人たちに比べていまの政・財界人はどうか。

春闘と直接関係はないが、松下幸之助氏は、「松下政経塾」の初代塾長に労働界のリーダー、宮田儀二氏を招聘。その柔軟な思考性が実を結び、宮田塾からは逢沢一郎氏(自民)、前原誠司、野田佳彦(民主)氏等、与・野党にまたがる幾多の人材を輩出している。私にはいま万事、あまりにも小粒になったような気がするが。老人の繰り言と片づけられは心外である。

さざわ・としかず会員 1927年生まれ 54年産経新聞入社 地方部を経て政治部 首相官邸 自民党 野党 大蔵 外務省など担当 政治部次長 編集委員 79年退社 現在 NPO法人理事長 著書に「新政治勢力の時代」「日本の分岐点」「政治部秘史」(共著) など。

私が出会った 中蘭英助

伊藤氏のインタビューに笑顔で1995年4月10日  
東京新聞提供

リレーエッセー⑦



中蘭さんは白髪が見事な作家だった。瘦身長軀、柔らかな顔に豊かな白髪。取材で同行したカメラマン氏が「絵になるな」と吹いていたのを、懐かしく思い出す。

中蘭さんは戦前、戦中、北京で邦字紙記者、同人誌「燕京文学」同人として青春の日々を送り、戦後に帰国。スパイものの作家として日本の文壇に登場したが、私が文化部記者としてお付き合いいただいた1990年代は、『北京飯店旧館にて』『北京の貝殻』『帰燕』など、青春の地・中国を舞台とした作品を立て続けに発表するという円熟期だった。いずれの作品も、香気と抒情に溢れていた。

青春時代の友情に、中蘭さんほどいい意味でこだわった作家を私は知らない。後年、北京を再訪した中蘭さんは、憲兵に捕らえられ

て獄死した中国人の無二の友・陸柏年をしのぶ場面を、『北京飯店旧館にて』で、次のように書く。還らぬ日々への愛惜をたたえた、胸をうつ文章だ。

「いや、ここまででいいんですよ」とわたしはいつたまま、階上へと大理石の手すりをうねらせている階段を見上げていた。そこには、うちひしがれて降りてくる二十歳の私自身がいた。(中略)ただ一人の中国人の親友を喪った日本人

中国・青春時代への愛惜

伊藤 章治

の青春が、あの日終わったのである。もう一人の親友が作家の袁犀。彼は戦時中に日本の文学賞を受けたが故に、文革時代に迫害を受け、失意の中で逝く。中蘭さんは、日本で出版された袁犀の作品紹介で彼の名誉回復を図る一方、日本に留学した彼の娘姚元元を親身に支援した。

また、『北京飯店旧館にて』が読売文学賞を受賞した折のスピーチでは「日本が多大な迷惑をかけた袁犀の娘が日本で苦学している。本来な

ら日本国が奨学金を出すべきですよ」と語りかけ、それに感動した佐治敬三サントリー会長が奨学金を提供。元元は無事、日本の大学を卒業している。

1996年、私は、北京のホテルで、元元と母親に会い、「中蘭先生は視力が落ちてしていると聞きまして。これを先生に届けてください」と両手で抱えるほどの紙袋を託された。その大きさが、袁犀と中蘭さんとの揺るぎない友情の証とも思えた。紙袋の中身は中国でも貴重な漢方薬で、中蘭さんにそれを届けると満面の笑み



いとう・しょうじ  
会員(元東京新聞文化部長)

み浮かべてこういった。「ありがたう。元元は作家志望。何か力になれることはないかな」。

この秋、私は所用で北京に行く。時間があれば、中蘭さんが愛した北京の下町の胡同(横丁)を歩きたい。元元の情報も知りたいのだ

民主党代表候補討論会メモ (5・15)

▼時間…16:00～17:15 ▼第1部(32分)…立候補に当たっての基本的な主張(持ち時間3分)の後、候補同士の討論。持ち時間10分で、相手候補の政策の疑問点、問題点などを質してディベート。最後に両候補が2分ずつまとめの発言▼第2部(43分)…会場の出席者から寄せられた質問を参考に企画委員会の代表が質問し、争点や問題を明確にして第1部の議論を深めた▼総合同会…川戸恵子、第1部司会…影山日出夫、第2部の代表質問者…橋本五郎、宮田謙一、倉重篤郎、原田亮介の各企画委員▼ベン取材225人、スチル代表の東京写真記者協会8社、テレビ、ラジオ中継、ENG関係などを含め合計310人▼放送はNHKが総合テレビと衛星第1で第1部だけ生中継(放送は16時35分まで ラジオも同様)、民放はTBSが代表で中継取材。夕方、夜のニュース番組で取りあげた。ENGはニュース映画協会代表(テレビ朝日)、FPIJ代表(フエニックスTV)のほかAP、ロイター、朝日ニュースタ、日経CNBC、MXテレビ、日本BS▼視聴率…関東3・5%、関西3・4%。

# 第74回 通常総会

5月29日(金)  
クラブ宴会場

日本記者クラブの第74回総会(2009年度通常総会)は、出席法人会員46社(代理出席含む)、委任法人会員84社、計130社の出席をもって成立(定足数72社)、定款23条により、滝鼻卓雄理事長が議長になり開催された。

2008年度事業報告(前号既報)、同収支決算ならびに次期繰越収支差額処分(次ページ参照)を理事会案どおり承認した。

続いて第19期役員への選任に移り、役員選出委員会の原案通り理事29人、監事3人を決定した。

この後、総会は一時休憩となり、新役員による理事会が別室で行われ、理事長に斎藤史郎氏(日本経済新聞)を互選、副理事長に宇治敏彦氏(中日新聞)、今井環氏(NHK)、専務理事に岩崎玄道氏を再任した。さらに総務、会員資格、企画、

会報、施設運営の各委員会委員長を別記のように決めた。

総会の席上、本年度の日本記者クラブ賞の贈賞式も行われ、伊藤正産経新聞中国総局長兼論説委員と阿武野勝彦東海テレビ放送報道局専門局長に、賞状と副賞としてプラチナ製の記念メダルが贈られた。

## 第19期役員 (2009.5.1~2011.5)

\*役職は5月29日現在

### ◇理事長(新)

斎藤 史郎 日本経済新聞社専務取締役電波・

電子戦略・日経ヴェリタス・経理・

教育事業本部担当

### ◇副理事長(再)

宇治 敏彦 中日新聞社相談役・論説担当

### ◇副理事長(再)

今井 環 日本放送協会理事・放送総局副総

局長

### ◇専務理事(再)

岩崎 玄道

### ◇理事・総務委員長(再)

朝比奈 豊 毎日新聞社代表取締役社長

### ◇理事・会員資格委員長(新)

朝倉 敏夫 読売新聞社専務取締役論説委員長

### ◇理事・企画委員長(再)

船橋 洋一 朝日新聞社主筆

### ◇理事・会報委員長(再)

住田 良能 産経新聞社代表取締役社長

### ◇理事・施設運営委員長(新)

渡辺興二郎 テレビ朝日取締役

### ◇理事

伊藤 修一 共同通信社常務理事・編集局長

栢森 哲也 時事通信社取締役社長室・マーケ

ット事業推進・マスメディア担当

宇佐美暢子 北海道新聞社東京支社長

土山 昭則 西日本新聞社執行役員東京支社長

三石 正俊 信濃毎日新聞社取締役東京支社長

越宗 孝昌 山陽新聞社代表取締役社長

野口 正一 南日本新聞社東京支社報道部長

塩野 寿伸 山形新聞社常務取締役東京支社長

児玉 良平 愛媛新聞社東京支社長

八木橋俊夫 陸奥新報社東京支社長(局長待遇)

神谷 哲史 TBSテレビ報道局長

久保伸太郎 日本テレビ放送網取締役相談役執行役員

小櫃真佐己 フジテレビジョン常務取締役

藤延 直道 テレビ東京常務取締役

榎本 恒幸 毎日放送取締役東京支社長

上野 輝幸 九州朝日放送取締役東京支社長

竹村 均 北陸放送取締役東京支社長

鳥居 元吉 日本新聞協会専務理事

玉川 寿夫 日本民間放送連盟専務理事

梅田 光男 日本プレスセンター専務取締役

### ◇監事

山本 利昭 高知新聞社東京支社長

齊藤 寿 北日本新聞社東京支社長

山田 伴一 北海道放送役員待遇東京支社長

2008年度収支計算書

自 2008年4月1日  
至 2009年3月31日

科 目	予算額	決算額
<b>Ⅱ 特別会計収支の部</b>		
1. 特別会計収入		
特定資産取崩収入	0	2,488,500
クラブ賞積立預金	0	2,488,500
特別会計収入計	0	2,488,500
2. 特別会計支出		
特定資産取得支出	60,000,000	60,780,000
退職準備積立預金	30,000,000	30,000,000
資産準備積立預金	30,000,000	30,000,000
特別積立預金	0	780,000
特別会計支出計	60,000,000	60,780,000
特別会計収支差額	-60,000,000	-58,291,500
<b>Ⅲ 予備費支出</b>	18,251,000	0
当期収支差額	-50,000,000	-15,134,197
前期繰越収支差額	80,961,973	80,961,973
次期繰越収支差額	30,961,973	65,827,776

科 目	予算額	決算額
<b>I 事業活動収支の部</b>		
1. 事業活動収入		
会費収入	[369,682,000]	[366,036,700]
(1) プレス会員会費	(312,676,000)	(310,746,500)
法人会員会費	213,751,000	213,353,400
個人A会員会費	26,846,000	25,779,500
個人B会員会費	2,715,000	2,697,000
個人C会員会費	9,363,000	8,654,700
個人D会員会費	60,001,000	60,261,900
(2) 賛助会員会費	(57,006,000)	(55,290,200)
法人賛助会員会費	45,582,000	43,816,500
個人賛助会員会費	4,224,000	4,259,200
特別賛助会員会費	7,200,000	7,214,500
事業収入	[75,327,000]	[72,223,556]
(1) 貸室料収入	44,536,000	43,271,287
(2) 飲食売上割戻し金収入	23,819,000	21,747,694
(3) 施設機器賃貸料収入	6,972,000	7,204,575
雑収入	[2,155,000]	[3,835,802]
(1) 利息収入	1,805,000	3,418,612
(2) その他の雑収入	350,000	417,190
入会金収入	0	780,000
事業活動収入計	447,164,000	442,876,058
2. 事業活動支出		
事業費	[240,380,000]	[224,946,921]
借室維持費	(176,011,000)	(175,857,509)
借室料	100,106,000	100,106,676
共益費	16,640,000	16,639,944
空調・光熱・水	9,265,000	9,110,889
ホール専用利用	50,000,000	50,000,000
事業費支出	(64,369,000)	(49,089,412)
会議費	4,535,000	2,822,853
事業運営費	31,672,000	21,966,150
会報発行費	17,300,000	15,109,315
運営雑費	1,542,000	472,969
通信費	4,500,000	3,194,125
印刷費	3,560,000	2,901,150
交通費	1,260,000	134,350
クラブ賞実施費	0	2,488,500
管理費支出	[178,533,000]	[174,771,834]
(1) 人件費支出	(146,061,000)	(147,131,861)
給与金	83,614,000	84,045,128
賞与・諸手当	60,447,000	61,848,727
厚生費	2,000,000	1,238,006
(2) その他管理費支出	(32,472,000)	(27,639,973)
クラブ管理費	23,124,000	20,898,064
機器備品費	1,500,000	794,735
消耗品費	3,500,000	2,499,645
事務委託費	3,436,000	2,884,209
事務雑費	912,000	563,320
事業活動支出計	418,913,000	399,718,755
事業活動収支差額	28,251,000	43,157,303

〔次期繰越収支差額の処分〕  
2008年度決算の結果生じた次期繰越収支差額6582万7776円のうち、5582万7776円を増加貸料積立預金に積み増しし、1000万円を次期に繰り越す。

■ 会議報告 ■  
第182回施設運営委員会

(5・12 小会議室)

新委員の國府一郎新聞協会総務部長(旧・阿部裕行氏)を紹介した後、3月、4月のアラスカ売り上げと貸室利用状況について、事務局が報告した。  
出席 神谷委員長、高橋、加藤、國府、佐藤、鈴木、渡部の各委員。

第302回会報委員会

(5・13 シルバールーム)

5月号について意見交換した後、6月号の編集について協議した。  
出席 住田委員長、枇杷田、石田、竹居、村澤、渡辺の各委員。

第381回会員資格委員会

(5・19 小会議室)

6月1日付の会員入退会を審議し、理事会に答申した。

出席 斎藤(史)委員長、森、布施、大橋、金子、坂本、若松、川嶋の各委員。  
第387回企画委員会

(5・21 宴会場)

司会担当の委員が行事を報告した後、今

貸 借 対 照 表

2009年3月31日現在

科 目	当年度	前年度	増 減
<b>I. 資産の部</b>			
1. 流動資産			
現金 預 金	48,133,159	63,895,482	- 15,762,323
現 金	1,088,117	1,861,089	- 772,972
普 通 預 金	45,806,421	60,654,113	- 14,847,692
振 替 貯 金	1,238,621	1,380,280	- 141,659
仮 払 金	200,000	389,329	- 189,329
立 替 金	10,150,380	11,006,181	- 855,801
未 収 会 費	9,260,000	6,217,000	3,043,000
未 収 貸 室 料	1,588,123	1,184,976	403,147
前 払 金	11,789,291	11,838,200	- 48,909
流 動 資 産 合 計	81,120,953	94,531,168	- 13,410,215
2. 固定資産			
(1) 特定資産			
退職準備積立預金	309,233,682	279,233,682	30,000,000
資産準備積立預金	337,553,415	307,553,415	30,000,000
増加賃料積立預金	131,416,201	131,416,201	0
特別積立預金	74,047,845	73,267,845	780,000
預りクラブ賞積立金	100,671,095	103,159,595	- 2,488,500
特 定 資 産 合 計	952,922,238	894,630,738	58,291,500
(2) その他固定資産			
内 装 設 備	13,236,654	15,116,184	- 1,879,530
什 器 備 品	3,392,216	4,485,433	- 1,093,217
敷 金	32,271,109	32,271,109	0
保 証 金	55,342,000	55,342,000	0
その他固定資産合計	104,241,979	107,214,726	- 2,972,747
固 定 資 産 合 計	1,057,164,217	1,001,845,464	55,318,753
資 産 合 計	1,138,285,170	1,096,376,632	41,908,538
<b>II. 負債の部</b>			
1. 流動負債			
仮 受 金	2,277,300	2,004,300	273,000
預 り 金	150,029	0	150,029
未 払 金	12,865,848	11,564,895	1,300,953
流 動 負 債 合 計	15,293,177	13,569,195	1,723,982
2. 固定負債			
退職準備引当金	309,233,682	279,233,682	30,000,000
資産準備引当金	337,553,415	307,553,415	30,000,000
増加賃料引当金	131,416,201	131,416,201	0
特別積立金引当金	74,047,845	73,267,845	780,000
クラブ賞積立引当金	100,671,095	103,159,595	- 2,488,500
固 定 負 債 合 計	952,922,238	894,630,738	58,291,500
負 債 合 計	968,215,415	908,199,933	60,015,482
<b>III. 正味財産の部</b>			
1. 指定正味財産			
指定正味財産合計	36,692,328	36,692,328	0
2. 一般正味財産			
正 味 財 産 合 計	170,069,755	188,176,699	- 18,106,944
負債及び正味財産合計	1,138,285,170	1,096,376,632	41,908,538

後のシリーズ研究会の進め方やゲスト候補などを協議した。

出席 船橋委員長、宮田（謙）、脇、原田、高畑、菅沼、会田、田崎、影山、川戸、井田、和田、川村、広瀬、高橋の各委員。

△法人会員代表変更▽  
 山陽新聞社  
 (新) 越宗 孝昌 代表取締役社長  
 (旧) 佐々木勝美

第472回理事会

(5・29 大会議室)

第19期の理事長、副理事長、専務理事を互選し、総務、会員資格、企画、会報、施設運営の各委員会委員長を決定した。

出席 斎藤理事長、宇治、今井副理事長、岩崎専務理事、朝比奈、朝倉、伊藤、栢森、土山、野口、塩野、児玉、八木橋、神谷、久保、渡辺、藤延、榎本、竹村、鳥居、玉川、梅田の各理事。齊藤、山本、山田の各監事。

●ゴルフの会 竹内實昭会員が優勝

第92回ゴルフ会が5月12日、磯子カンツリークラブで開催されました。この日は、好天に新緑が映える絶好のゴルフ日和。初参加の松永太会員（中日OB）を含め参加者17人がプレーを楽しみました。

優勝は竹内實昭会員（朝日OB ネット73）。2位は青木徹郎会員（TBSOB）、3位は森本英之会員（朝日OB）でした。

## 情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

## ■ショパン生誕200年記念事業の発表

ポーランドでは、ショパン生誕200年となる2010年に様々な記念事業を行う。これらの内容について、ヴァルデマル・ドンブロフスキ「ショパン2010」事業実行委員長らが会見した。ショパンの誕生日は2/21と3/1の2説があり、その両日にまたがる10日間に、世界トップクラスのピアニストがワルシャワに集い、さまざまなコンサートが開かれる。2005年から開催されている「ショパンと彼のヨーロッパ国際音楽祭」も、例年より規模を拡大して8月いっぱい開催される。また、10月に行われる第16回ショパン国際ピアノコンクールの概要も発表された。詳細はポーランド政府観光局のウェブサイト[http://www.poland.travel/ja/pot\\_front\\_page](http://www.poland.travel/ja/pot_front_page)で。(5. 8 宴会場)

## ■科学ジャーナリスト賞2009 授賞式

日本科学技術ジャーナリスト会議（JAST）小出五郎会長 <http://jast.jp/> が優れた科学ジャーナリストの仕事を顕彰するもの。4回目の今年は、「ダーウィン「種の起源」を読む」（化学同人）の北村雄一氏（サイエンスライター、イラストレーター）に大賞が贈られた。そのほか、信濃毎日新聞文化部の磯部泰弘記者、吉尾杏子記者（連載記事「いのちを紡ぐ」）、出河雅彦・朝日新聞編集委員（著書「ロボ 医療事故」）らに科学ジャーナリスト賞が贈られた。(5. 14 10Fホール)

## ■秋田を応援する首都圏文化人会議

県にゆかりがある文化人の集まりとして06年に発足した。佐々木毅氏、明石康氏、内館牧子氏らが参加している。存廃が取りざたされている3セク秋田内陸線存続のための運動などを行ってきたが、より組織的な活動を進めるためNPO法人化を目指すことをこの会合で決めた。(5. 14 宴会場)

## ■プレッセンター・メディカルモール5周年を祝う会

プレッセンタービル地下1階には、中澤プレッセンタークリニック（外科・内科・乳ガン検診など）、中田クリニック（呼吸器科・内科など）、日比谷滝村クリニック（心療内科・神経科など）、志保日比谷皮膚科クリニック、歯科オノザワ、霞ヶ関土居美佐クリニック（婦人科・内科）の各医院とワタナベ調剤薬局が軒を並べ、「医療通り」となっている。各分野の専門医院が集まるきっかけとなった中澤クリニック開院5周年を機に、関係者が懇親会を開いた。(5. 15 宴会場)

## ■マスコミ志望学生向け講座

フジサンケイ人材センターが、マスコミへの就職を希望する学生を対象に主催した。全4日間の日程で、各紙・各局の報道や編成、人事など各分野担当者による講義が行われた。(5. 18、20、22、25 10Fホール)

## ■今年度の情報通信政策の展開

鈴木康雄・総務審議官が、情報通信政策の展望について講演した。主催=MMフォーラム21 <http://teishin-net.co.jp/mmforum21-jimukyoku.html> (5. 19 宴会場)

## ■オーストリアの鉄道技術を紹介

オーストリアの鉄道は長い歴史と高い技術を誇り、8カ国に囲まれているという地理条件から国際列車も多く、ヨーロッパの鉄道網の要となっている。この鉄道技術を紹介するセミナーを大使館商務部が開催した。オーストリア連邦鉄道、グラーツ工科大学、鉄道総研からの専門家による基調講演の後、オーストリア企業の軌道、踏切、集電装置といった最新技術が紹介された。(5. 21 10Fホール)

## ■水野和夫氏講演「“経済大潮流” こう展開する」

## 新しいOB会員

未来をひらく日本委員会（尾畑雅美会長 <http://www.nihoniinkai.com/>）の主催で、水野和夫・三菱UFJ証券チーフエコノミストが講演した。(5. 21 10Fホール)

## ■シンポジウム「医学ジャーナリストを問う—衰退する検証力と発信力」

日本医学ジャーナリスト協会（大野善三会長 <http://www.meja.jp/>）が、医療をめぐる問題が多発する中でジャーナリストの役割をテーマに開催した。パネリストには全国紙の医療記者だけでなくフリーのジャーナリストも加わり、相互の批判と反省をまじえ、医療報道のあり方について議論した。(5. 23 10Fホール)

## ■武藤敏郎元財務次官講演

千代田プレスクラブ（今井久夫会長）で、武藤敏郎・大和総研理事長が「金融危機と世界経済の動向」のテーマで講演した。(5. 25 大会議室)

## ■東京女子大学旧体育館解体反対のアピール

東京女子大学がキャンパス整備の一環で旧体育館を解体する計画につき、卒業生や建築家の「保存を要望する有識者の会」が会見した。旧体育館は、チェコ出身の米国人建築家アントニン・レーモンドの設計により1924年に完成。レーモンドは1919年にフランク・ロイド・ライトとともに来日し、帝国ホテルの設計にも携わった。同会は、旧体育館は重要文化財級の近代建築として解体に反対、大学の姿勢について「合理的な説明がない」と批判した。(5. 25 大会議室)

## ■北日本政経懇話会

北日本新聞が主催する富山県関係者の懇話会で、元NHK解説委員の河崎曾一郎氏が今後の政局展望について解説した。(5. 25 大会議室)

## ■とちぎ応援団U字工事取材会

下野新聞に掲載する広告記事の取材が行われた。東芝が各県ごとに行う製品キャンペーンの一環で、栃木向けPRには、福田富一知事から「とちぎ応援団」に任命された那須郡出身の漫才コンビ・U字工事が起用された。(5. 27 宴会場)

## ■亀井静香・国民新党代表代行講演

内外問題研究会（細川隆一郎氏主宰）で、国民新党の亀井静香代表代行が、総選挙に向けた展望について話した。(5. 27 大会議室)

## ■放送人政治懇話会

次のようにゲストを招いた。亀井久興・国民新党幹事長 (5. 13)、太田昭宏・公明党代表 (5. 21)、蓮舫・民主党参院議員 (5. 27)。

## バー、レストラン、宴会

予約電話 和食3503-2723 洋食3503-2766

吉  
富  
カクテル

## 印象的な香草の香り

6月のカクテルは「Black and Tan」。スイートベルモットにハーブの香りが特徴的なフランス産リキュール・ベルノーを加えました。

和  
食

## 伊勢海老の懐石膳

◆突き出し三種盛り、刺身・伊勢海老姿造り、焼き物・鮎塩焼き、焚き合わせ・伊勢海老具足煮、揚げ物・穴子と豆腐の煮おろし、食事・伊勢海老味噌椀、季節のフルーツ (5,250円 6月26日まで)

洋  
食

## 千倉産アワビのステーキコース

◆オードブルの盛り合わせ、ヴィシソワーズスープ、千倉産アワビのステーキ ハーブソース、サラダ、マンゴープリン、コーヒーまたは紅茶パン (6,825円 7月24日まで 昼・夜とも)

<会員現況> 法人会員 142社 基本会員 781人  
個人会員 1,551人 法人・個人賛助会員 68社 174人  
特別賛助会員 81人 名誉・功労会員 9人  
計 210社 2,596人

HP <http://www.jnpc.or.jp/>

## 「会見速記録」：5月の新規掲載

- 樋口美雄慶応大学教授「非正規雇用の変遷と問題点」(2009. 3. 4)
- 塩川伸明東京大学教授「旧ソ連地域の民族問題：その文脈と視点—コーカサスに力点をおきながら—」(2009. 4. 3)
- 堀田力元東京地検特捜部検事「重大で悪質な犯罪だから逮捕した」(2009. 4. 10)
- 村山治朝日新聞編集委員「いまの検察執行部は『情報開示義務違反』重視派」(2009. 4. 14)
- 宗像紀夫元東京地検特捜部長「検察の役割と政治をめぐる」(2009. 4. 20)
- 田崎史郎時事通信解説委員長 著者と語る『政治家失格』(2009. 4. 22)
- 民主党代表候補討論会 (2009. 5. 15)

## クラブの電話 ダイヤルイン

和食レストラン (9階)	会員事務
3503-2723	3503-2725
洋食レストラン (10階)	経 理
3503-2766	3503-2728
貸室予約、宴会打ち合わせ	
3503-2724	
受付	会見申し込みアドレス
3503-2721	kaiken@jnpc.or.jp
クラブ行事への申し込み	ホームページアドレス
3503-2722	<a href="http://www.jnpc.or.jp">http://www.jnpc.or.jp</a>

## 会報委員会

委員長=住田良能

委員=石田昭彦 上村幸治 竹居照芳 富田 恵  
枇杷田裕 見市 元 村澤繁夫 渡辺みどり

連絡=長谷川和子 本庄五月

(電話 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271)

## ホールご案内

会員社のホールで開催されるコンサートなどの情報をご紹介します。

## ●日経ホール

♪7/16 ベルリンフィル12人の金管奏者たち  
ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の金管奏者12人のアンサンブル (¥8,500)

問い合わせ：03-5281-8074

<http://www.nikkei-hall.com/>

## ●王子ホール

♪7/14 ジョナサン・ビス

前半はハイドンとシューマン、後半はヤナーチェクのソナタとベートーヴェンの「熱情」(¥5,000)

問い合わせ：03-3567-9990

地下鉄銀座駅徒歩1分

## ●サントリーホール

♪7/18「それいけ！オルガン探検隊2009」

パイプオルガンの仕組みや音色、歴史を子ども向けに紹介。(1,000円)

♪7/25「こども定期演奏会」

こどものためのオーケストラ定期演奏会。指揮・おはなし：大友直人 演奏：東京交響楽団 (3,000円)

チケットセンター：03-3584-9999

鮫島明子ピアノリサイタル (ブネウマシリーズⅡ～ベートーヴェン) が7/7に横浜みなとみらいホール小ホールで開催されます。  
問い合わせ：045-682-2000

## 「会合のお知らせ」用にメール登録を

会見や研究会などのクラブ行事は電子メールでもお送りしています。急な変更やキャンセルなどがあると、ハガキでご案内できない場合がありますが、メールでは必ずお知らせしています。また、出席のお申し込みも返信するだけで簡単にすませることができます。

メールでの案内をご希望の方は下記のメールアドレスへその旨をお知らせください。

登録用電子メールアドレス kaiken@jnpc.or.jp

## 会員の著書

木版画 萬葉秀歌 宇治敏彦会員

新訂 新聞学 桂敬一会員他

ブーチンと柔道の心 小林和男会員

だらばち記者 奮闘記 畠中茂男会員

## &lt;訃報&gt;

白井敏之会員 (個人D・共同通信OB、75歳) が5月2日、斎藤哲会員 (個人D・日本経済新聞OB、70歳) が5月23日死去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

## 今後の行事予定 (6/3現在)

- 6. 15 (月) 15:00~16:30 (10階ホール)  
シリーズ研究会「オバマのアメリカ」⑦  
西崎文子 成蹊大学教授
- 6. 18 (木) 14:30~16:00 (10階ホール)  
著者と語る『拉致』 蓮池透氏
- 6. 26 (金) 14:30~16:00 (10階ホール)  
研究会「世論調査」①  
峰久和哲 朝日新聞編集委員

行事案内専用電話 03-3503-3764

日時の変更なども含め、最新のクラブ行事をテープでお知らせしています。



## 写真回廊

撮影 家根 和一  
(やね・かずいち 時事通信社写真部)

公設秘書の起訴を受けての会見中、目頭を押さえる小沢氏  
 〓 3・24 永田町民主党本部

### 1票の重さ

小沢一郎氏が無念の涙をぬぐう1枚の写真。日頃の言動から涙ならぬ「ソラ涙」のようにも見えます。こんなことを思い出しました。小沢氏の育ての親は目白の闇将軍、田中角栄氏でした。光陰矢のごとし、24年前の85年春。病で倒れる前後の角栄氏となぜかイメージがだぶってしまいます。重い瞼、崩れかかった顎の輪郭は角栄氏が小沢氏に乗り移ったかのようです。

確か小沢氏もご多分にもれず「2世」でいらっしやいましたね。この春3月、西松建設の献金事件で小沢氏の公設第一秘書が逮捕されました。スワッフ議員辞職、代表辞任で下野するかと思いきやとんでもない。

これは素人考えなのです。代表の座に居座ること2カ月。その間、メディアや各方面から「説明責任を」と、やいのやいの追及されても全てシカト、押し通してしまった神経の太さは見上げたものです。ようやく辞任はしたものの「筆頭代表代行」ですって。賞味期限切れのお料理を、盛り付けをかえただけで何の代わり映えもしませんね。

小沢氏についてこんなことを言う人もいます。この人の集金能力なくしては、選挙は戦えないのだと。小沢氏が国民に対し説明責任を果たし政治家として日本を任せることができるかどうか。あらためて1票の重みを考えさせられました。  
(渡辺みどり)